

湖をめぐる良き出会いの連鎖

点ではなく線になること。点と点を結ぶ線ではなく、動く線になること。世の中を変える良き出会いの連鎖は、動く線が生み出すのではないか。偶然かもしれないが、アサザは動く線のイメージと見事に重なる。

人々が湖に植えたアサザは、はじめは一株ずつ湖底に根を張るが、しばらくすると湖底を這う茎を四方八方にのばし始める。今度はのばした茎の節々から根を出して、水面に浮くハート型の葉を何枚か出すと、それらの節々から再び四方八方に茎をのばし始める。時間が経てば最初の株（基点）がどこにあったのか分からなくなってしまう。湖で自然に発芽したアサザも同じように広がっていくのだ。

わたしたちが普段目にするアサザは、湖面で静かにゆれながらハート型の葉や黄色い可憐な花を無数に浮かべているが、その光景の下にはまた別の世界がある。アサザは水面下では動く線となって、「中心の無い動的なネットワーク」を作り上げているのだ。

「多少とも自然の生きた直観に到達しようとするれば、われわれ自身がこの自然の示す実例そのままに形成を行えるような、動的でのびやかな状態に身を置いていなければならない。」もしも、わたしの中でアサザがイメージとして芽生えていなかったら、このゲーテの言葉に出会うこともなかっただろう。

「出会い」という言葉がわたしの中に浮かんできたのは十代後半だった。わたしという場をとおして、様々な出会いが生じる様を感じ取ることで、それが本当に「知ること」であり「理解すること」ではないかと、その頃思い始めた。「知」とは、そのような出会いの連鎖によって形作られていくのではないかという微かな確信が、わたしの中で芽生えていった。その頃から「良き出会い」を求める手探りの歩みが始まった。「出会い」に忠実に生きること、つまり「独学」を決めたのもその頃だった。

動く線であるアサザが、今わたしが自分自身についてこのように語ることを可能にしてくれているのだと思う。「動的でのびやかな状態」に、「動く線」になることが、わたしの理想であった。動く線は、点と点を結ぶ線ではない。そこには保証するものも、公認するものも無い。基点となる不動の点（権威）とは無縁な線だ。

評価（基点）を求める者は、動く線にはなれない。良き出会いの連鎖を求める者だけが、そして、自分を出会いの場として開くことができる者だけが、動く線になることができる。

動く線になることは、世界の広がりと共に生きることである。アサザプロジェクトは湖でのアサザとの出会いから始まった。広大な湖と流域に展開するプロジェクトを可能にしたのは、アサザという動く線である。

動的でのびやかな線は、「点と点を結ぶ線」には不可能な想定外の出会いを次々と生み出していくことができる。点と点を結ぶ「可能性」の背後に沈んでいた、広大な「潜在性」の中に飛び込んでいくことで、新たな発想が次々と得られる。

「良き出会いの連鎖」という言葉を、わたしは最近になって17世紀のオランダの哲学者スピノザの「エチカ」から得た。「人々は良きにせよ悪しきにせよ、自分に何が出来るかを知らない。」エチカは20世紀の哲学者ドゥルーズの言葉を借りれば、人が成すべき事の理論に対する、人が成し得る事の理論を提示したものである。人が成し得る事とは、良き出会いの連鎖をとおして、自分と共に世界を変えていくことだとわたしは思う。それは誰にでも出来る。自分の中で起きた出会いに気づき、素直に驚き、喜びを見出すことから始めればいい。そして、喜びに促されながら、さらに良き出会いの連鎖を求めて、少しずつ自分を場として開いていくことができれば、自分に成し得る事が見えてくるはずだ。個々の人格が場として機能するネットワークは、そこから世界へと展開していく。

種は蒔かれた。いつどこで芽生えたか、忘れ去られる種がすでに蒔かれている。

2008年11月13日

NPO法人アサザ基金 代表理事 飯島 博